

筑波大学の「今」を切りとる季刊広報誌

TSUKU COMM

TSUKUBA COMMUNICATIONS

【ツクコム】

機械班
Machinists

vol.
41
2018 AUTUMN



筑波大学
University of Tsukuba



04 「聴」吉水千鶴子 教授

08 「TSUKUBA OBOG」三上文晴 氏

10 「附属学校めぐり」筑波大学附属久里浜特別支援学校

12 「躍動 筑波大生」星子啓太さん／宮澤菜々子さん

14 「Homeland」エリウド・キプロブさん

16 TOPICS | 23 世界のトピラ | 24 リレーメッセージ



いにしえの人々との遭遇

仏教のルーツに残された思索の痕跡を辿る

人文社会系

吉水 千鶴子

教授

Chizuko Yoshimizu

仏教の起源はインドです。しかし、ヒンドゥー教化やイスラムの侵入などの中で、その教えはアジアに広く継承され、チベット民族は今も自分たちのアイデンティティとして大切にしています。紀元前に説かれたブッダの言葉は弟子たちによって語り継がれてきましたが、現在、書物として残っているのは、様々な解釈や他言語への翻訳を経た後の時代のもの。それぞれの時代における地域の人々の暮らしや思想が詰まったタイムカプセルにも似ています。

■「私をなくす」という生き方の極意

仏教には「神」への信仰はありません。普通の人々が修行、つまり自己改革をしてより良い人間になることが、仏教が目指す究極の到達点です。そのキーワードは「無我」「無常」。人は誰でも心安らかに暮らしたいものですが、社会的地位や財産、家族などを「私のもの」と執着してしまうと、それらを失ったり、思うようにならないことへの不安が募ります。また、どんなに裕福でも、病気や老いから逃れることはできません。そもそもブッダが、王子という地位や妻子を捨てて修行の旅に出たのは、そういった不安から解き放たれ、真の「安心」を得るためでした。そうして仏教がたどり着いたのが、無我、つまり「私をなくす」と

いう考え方です。

「私」とは、生まれた時から持つ肉体や精神を、自分がそう認識しているだけで、客観的な実体として存在しているとは言えず、そこにこだわっても仕方ありません。ブッダが説いたのは、「私」という思いを減らすこと。そして、人の死など、物事には必ず終わりがあり、移ろい、無常だということ。それは理屈ではわかっている、容易には受け入れられないでしょう。けれども、神のような超越的なものにすぎたのではなく、現実を受け入れ、ひたすら自分の心の内で考えなければなりません。滝に打たれたり坐禅を組まなくても、その葛藤こそが修行なのです。オリジナルの仏教は極めて合理的で、現代の私たちも十分に理解できる思想です。

■インドからチベットへ

仏教が生まれた紀元前5世紀ごろのインドには「書く」という手段や文化がなく、ブッダの教えは弟子たちの口伝によって広められました。その後、書物としても多くのものが作られました。それは異なる国や時代を越えて伝わる過程で、当然、変化していきました。今、私たちがイメージする仏教、お葬式をしたり、極楽浄土や生まれ変わりといった考え方も、後に付け加えられたものです。

仏教は6～8世紀に全盛期を迎え、チベットやネパール、日本にも伝わりました。しかし13世紀ごろになると、ヒンドゥー教やイスラム勢力が台頭し、インドでの仏教は衰退していきました。一方、チベットでは、民族のアイデンティ



INTERVIEW



海外教育研究ユニット招致プログラム

本学の教育研究力強化のため2014年に発足した制度で、海外の世界トップレベルの大学又は研究機関から研究ユニットを招致する。その1例目として人文社会系では、ハンブルク大学(ドイツ)アジア・アフリカ研究所インド学チベット学研究室から3名の研究者を招聘し、これまでの4年間で、インド学、チベット学、仏教学にまたがる研究拠点を形成するとともに、国際ネットワークの拡充や若手研究者の育成、研究発信においても顕著な成果をあげている。この9月にも国際会議を主催した。

<https://ierlp.jinsha.tsukuba.ac.jp>

PROFILE

よしみづちづこ

東京生まれ。学習院大学で哲学を、東京大学大学院でインド哲学・仏教学を学び、1994年オーストリアのウィーン大学でチベット学・仏教学分野の博士号(Ph.D.)を取得。2003年筑波大学に着任、2011年より現職。2018年現在、日本学術会議連携会員、国際仏教学会東アジア代表を務める。インドとチベットの仏教思想史を専門とし、とくに中観思想、仏教論理学の哲学的内容とその変遷、インドからチベットへ仏教思想が伝承されるプロセスを追う。人文社会系における海外教育研究ユニット招致プログラムの責任者として国際的な研究拠点形成に尽力する。



ティとして、大切な心の拠り所となりました。チベット仏教は、今も本来の姿をかなり忠実に守っており、仏教のルーツを探ろうとすれば、チベットに行き当たるのです。もちろん近代化に伴って、僧侶の在り方も変わっていますが、今でも出家する人は多く、一家に僧侶になる者がいることは名譽だと考えられています。しかしながら、チベット仏教にとって激動の時代ともいえる10~13世紀の資料はほとんどなく、研究としては停滞していました。



新たに発見され復刻されたチベット語の書物の一冊。ページは縦じずに束ねられている。

■新たに発見された膨大な書物たち

ところが、2000年代に入ってから、何百冊にも及ぶこの時期の書物が、中国の寺院から発見されました。おそらく、17世紀ごろにダライ・ラマが集めて隠しておいたものだろうと言われていています。多くの寺院が破壊された文化大革命を経ながら、これだけの資料が残っているのは奇跡的です。現在、世界中の研究者がその解読に取り組んでいます。

これらの資料は仏教研究の流れを大きく変えましたが、日本語で言うところの草書体のような字体で書かれたチベット語の文献を読むのは一苦労です。まず活字体に変換し、それから読み解いていきます。そもそもチベット語がわかる人が少ない上、チベット仏教研究者

もそれほど多くはありません。ゲノム解析のように、みんなで手分けして一斉に全容を解明する、といったふうではなく、それぞれ自分の関心のある部分から研究を進めています。

■心踊る過去との対話

これらの文献に書かれているのは、当時のチベットの人々による仏教の教義の解説です。この時代に新たに多くの仏典がインドのもともとの言語であるサンスクリット語からチベット語に翻訳されました。他国へ広めるには当たり前とはいえ、それを一般信者が行なったとは考えにくく、翻訳の専門家がいたことを示しています。現代のように知識や情報に乏しい時代、しかも文化の異なる国の間で、どう

やって言語の変換という複雑な作業が行われ、知恵や思想を共有することができたのでしょうか。私たちの想像以上に、人や文化の交流は盛んだったのかもしれませんが。そのプロセスを知るヒントがこの資料の中に隠れているはず。

この時代の人々が、ブッダの教えを巡って、こんなにも多くの書物を書き残したということ自体も驚きです。そこには、その時代の政治や文化などの社会的背景が反映されており、その中でどう生きるべきかを悩み、あれこれ考え抜いた様子もうかがい知ることができます。時には、その書物を書いている人の気持ちまで、手に取るようにわかることもあります。古い資料を読み解くのは地道な作業で、一生をかけても何冊も読み進められるわけではありませ

んが、過去の人々と対話しているような、ワクワクする瞬間がたくさんあります。

■仏教研究を通じた他者理解

仏教のような東洋思想は、欧米でも大いに研究されています。筑波大学では、ドイツのハンブルク大学からインド学・チベット学の教授3名をユニットとして招致しました。ユニークなのは、この3名が、ドイツ人・日本生まれのアメリカ人・ブータン人と、多様な背景を持っていること。ここに日本人研究者も加わって、国際色豊かな研究環境が整っています。新たな資料の発見は、仏教研究における世界的な連携協力へのニーズを高めます。その拠点となるべく、精力的に研究教育

を推進しています。

未読の資料が研究されれば、仏教について、これまでとは全く異なる考え方が見つかるかもしれません。しかし、そのことで現在の宗教としての仏教が変わるということはないでしょう。仏教研究はむしろ、思想研究、あるいは一種の他者理解と捉えるべきです。ブッダが本当に何を語ったのか、直接確かめることはできません。しかし残された資料の中で人々は、ブッダのように安心を得るために、些細なことをとにかくたくさん考え、いろいろな行動を試みています。またそれが書物として読まれていたということは、さらに多くの人々が、生きる上での指針を求めていたわけです。そこには、遠い昔のことでありながら、現代人とも共通するものが感じられます。

TSUKUBA



株式会社学研プラス
趣味・実用コンテンツ事業部 趣味・カルチャー事業室
ムー編集部 編集長

三上文晴氏

未解明の不思議を追う

スーパーミステリーマガジン「ムー」といえば、隠れファンも多い人気雑誌です。オカルトや都市伝説など、非科学的と揶揄されがちな話題を扱っていますが、それはスタンスの問題。科学とは何か、考え抜かれた誌面が、読者の心を掴みます。

筑波大では物理学を専攻したそうですが、最初から出版社への就職を希望していたのですか。

当時の第1学群、朝永振一郎先生の後を継いだ研究室に所属していました。バリバリの理論物理ですね。その頃は、銀行などでディーラーとして理系を採用するようになって、就職先の選択肢は広がっていましたし、バブル期で、希望すればたいがい企業には行けそうな雰囲気でした。そんな中で、出版社に絞って就活していました。



バブルとはいえ出版業界は買い手市場だったので、何社も応募しましたが、学研が最初に内定をくれました。それでそのまま決めました。創業時に東京教育大出身の人が多かったようですから、その流れもあったのかもしれませんね。

入社して最初の半年ぐらいは歴史関係のムックシリーズを担当しましたが、それ以降、ずっと「ムー」の編集をやっています。雑誌という媒体自体が難しい時代ですが、研究者やライターの方々のおかげで続けることができ、来年で創刊40周年を迎えます。編集長になっても、ネタ探しにはいつも苦労していますし、取材をして記事を書く、という作業はずっと変わりません。

かなり怪しげだと思いつつも、つい目を引かれてしまいます。毎月、これだけの誌面が埋まるほど、そういう話題は尽きないものなのですね。

オカルト雑誌と言われることが多いのですが、UFO、超能力、古代文明、ツチノコなど、「ムー」で扱っている話題は、一つのカ

テゴリーでくれるものではありません。科学的でないという批判も受けますが、科学だって自然科学だけではないし、物理と化学と数学とでも物事の捉え方が違います。極端に言えば、「科学的」が意味するところも人によってバラバラです。ムーは、いろいろな見方に基づいた「説」を紹介し、読者に考えて欲しいというスタンスです。それで最近「哲学雑誌」と言っています。

哲学はすべての学問の源。博士号だって、英語だと分野に関係なく「Doctor of Philosophy」ですよ。哲学には宗教学と思想と美学があって、そのうちの思想の中に科学という概念がある。日本の教育では哲学をちゃんと学ぶ機会がほとんどないんだけど、こういうことを理解していないと、科学的云々の議論は不毛です。

人間とは何か、人類にとって最も重要なこの命題には、ギリシャ哲学以来、まだ答えが出ていません。そこからさらに、命とは何か、死後の世界はあるのか、などの様々な問いが生まれるのだけれど、それも答えは出ていない。答えがない、のではなくて、まだわかっていないんです。だからいろんな説があっ

ていいし、アマチュア研究者から大学教授まで登場できるんです。それが「怪しさ」として人を惹きつけるんでしょうね。

筑波大にはそういう考え方を養う土壌があったのでしょうか。

1980年代半ばに、筑波大でニューサイエンスの国際シンポジウムがありました。ニューサイエンスって今では死語ですが、要するに欧米の近代科学の方法論ではなくて、東洋思想みたいなものも取り入れて全体主義的な概念で科学を捉え直そうという動きのことで、ちょっとしたブームになりました。その国際シンポジウムは、スペインで第1回が開催されて、2回目がつくばでした。筑波大のフランス文学や哲学の先生たちが、その旗振り役だったんです。それで筑波大に興味を持って、進学しようと思いました。

筑波大にはいろんな都市伝説があって、それで新入生を脅かしたりしたものです。宿舎には幽霊話がいくつもありまして、秘密の生物実験施設で人面犬がつけられているとか、地下に「第4学群」があって、そこは軍事基地に

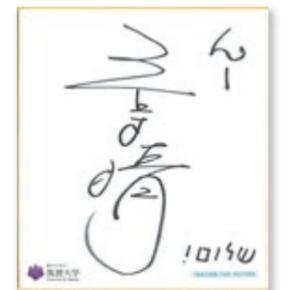
なっていて、いざ核戦争が起こったら、理系の学生は兵器開発に、体専(体育専門学群)は兵隊として送り込まれる、なんて話がまことしやかに伝わっていました。実際、第4学群の標識があったんです。どうやら当初は第4学群もつくる予定だったらしいですね。

そう聞くと、筑波大もなかなか怪しい所ですね。ご自身も学生生活を満喫されましたか。

今だから言うと、宿舎でもサークルでもずいぶん酒を飲まされましたよ。酔って暴れて松美池に飛び込んだりね。高校時代はバレーボールをやっていて地区大会優勝もしたんですけど、筑波大の部活はレベルが違いすぎて、サークルに入りました。そしたらメンバーが100人ぐらいて、とてもバレーボールにならない。それで2年生の時に、ワンダーフォーゲルを始めました。車はあるし、どこかに行きたくて。山登りや川下りをいろいろやりました。特に屋久島は過酷でしたね。スコールみたいなのすごい雨の中を決死の覚悟で登って屋久杉を見てきました。学業

は、理論物理で、基本的にはゼミが中心でした。4年生になっても週に4日とかゼミがあった、これが大変でした。

もし戻れるなら、学生時代に戻りたい。人生における夏休みの大半は大学時代に使うのではないのでしょうか。お金はないけれど、時間はたくさんあるし、責任もない。将来への不安もなく、いちばん楽しめる時期だと思うんです。だから、今の学生たちも、良い意味でも悪い意味でも、大いに遊んで欲しいです。もちろん、人に迷惑をかけたたりするのはダメですけどね。若いって素晴らしい。ぜひ今という時を楽しんでください。



色紙右下の文字はヘブライ語で「こんにちは」の意



PROFILE みかみたけはる

1968年 青森県生まれ
1991年 筑波大学自然学類卒業
同年、株式会社学研研究所(現 株式会社学研ホールディングス)に入社し、「歴史群像」編集部を経て「ムー」編集部所属。2005年、5代目編集長に就任。世界のミステリーや不思議現象を知的エンターテインメントとして発信し続ける傍、テレビ番組やイベントへの出演、コラム執筆なども精力的にこなす。信じるか信じないかはあなた次第。

附属学校 めぐり

たくさんの経験をたくさんの「伝えたい」に

筑波大学には11の附属学校があり、それぞれの分野でわが国の教育をリードしています。各学校のユニークな先生や授業、行事などの活動を紹介します。

筑波大学附属久里浜特別支援学校

附属久里浜特別支援学校 幼稚部

特別支援学校の中で知的障害を対象にした幼稚部があるのは全国でわずか8校、そのうち自閉症を伴う幼児のための教育実践・研究を行う唯一の教育機関。現在、3～5歳の計17人が在籍し、3クラスで10人の教員が指導にあたっている。人との関わりやコミュニケーション力を育む活動に重点を置くとともに、保護者や地域社会との連携、幼児期の特別支援教育に関する情報発信にも取り組んでおり、特別支援学校としての先導的な役割を担う。



ひよこ組(年少組)の子供たちが作った作品



かるだけで泣き出していたような子供たちが、年長クラスになると、元気よく飛び込んだり、水を掛け合って遊ぶようになります。お母さんも一緒にプールに入って、同じ体験を共有します。

体を動かすことだけでなく、水の冷たさなどの感覚や、思ったことをその場でストレートに伝えることができるのが、プール遊びの良さです。そういった直接的な体験が会話の題材になり、自宅へ帰ってからも保護者とのコミュニケーションを促します。

■子供の全体像を捉える

子供たちにとって、幼稚園は初めて自分の家や家族から離れて過ごすコミュニティ。この時期に、1対1の人との関わり、さらに、クラスや幼稚部全体の小集団との関わりをしっかりと身につけることが、学校や地域社会など、その先に広がるより大きな世界で生活していく上での基礎となります。

もちろん最初は慣れるだけで精一杯です。自分の好きなものや場所を見つけながら、少しずつ、幼稚園を安心できる場所にしていきます。その中で、先生との関わりも築きます。幼

稚部全体では、子供1～2人に対して1人の教員が指導にあたっていますが、必ずしも担任にはこだわりません。気に入った先生が一人だけで安心感が増しますし、その先生を軸に、他の先生や子供たちとも関わりが持てるようになります。

一方、自宅と幼稚園とで態度や行動が変わることもよくあります。子供たちも、相手や場面によって見せる顔を使い分けしているのです。また、些細な出来事が、その日の気分に大きく影響してしまうこともあります。ですから、自宅で、幼稚園で、どんなふうに通っているか、保護者との情報共有は欠かせません。そうやって、子供の全体像や成長の過程を互いに理解することが、指導にも生かされます。

■広い世界への入口に

知的障害と自閉症の両方を持っていること自体は珍しくありませんが、特別支援学校でも、そういう子供を専門に受け入れるところは極めて少ないのが実情です。一般の幼稚園や療育センターに通わざるを得ないケースがほとんどで、それぞれに試行錯誤を続けています。

思いを受けとめたい

高尾政代 副校長

「何を思い、考えているのかな。」私たち教師は、子供の表情を見たり、声を聞いたり、一緒に遊んだりしながら、子供の思いを想像しています。子供が人に「伝えたい」と思うようになるには、自分の思いを大人にしっかり受け入れてもらう経験が大切です。でも、子供の思いが分からないこともたくさんあります。小石を水たまり

そこで2016年、幼稚部の有志教員で「知的障害を伴う自閉症幼児教育研究会」を立ち上げました。特別支援学校の教員、地域の施設で障害児のケアに携わる人々や障害児の家族など50名ほどが参加しており、様々な事例を共有し、地域との連携や支援のあり方を考えようと、勉強会などを精力的に行っています。

障害のレベルは多様で、指導方法にセオリーはありません。それでも、こういった活動を通して、各施設の現状やニーズ、家族の悩みを知ることができ、主導的な役割を担う特別支援学校として、情報発信の拠点となり、地域とのつながりをより深めるモチベーションになっています。

幼稚部での3年間は、生活や学びの基礎を築く大切な期間です。通常学級の中で障害のある子供も一緒に学ぶインクルーシブ教育が目立っていますが、いつ、どのように学ぶかは、一様には決められません。とりわけ教育の初期段階では、少人数での丁寧な支援が大きな意義を持ちます。一人ひとりの子供に応じた指導の積み重ねがあるからこそその成長が、次の選択肢を広げる。幼稚部の子供たちの姿は、そのメッセージを伝えています。

■それぞれのコミュニケーション

学校まで付き添ってきてくれたお母さんと離れるときに泣き出す子もいれば、あっさり教室へ向かう子もいます。最初の20分ほどは、自由に過ごすウォームアップの時間。走り回ったり先生にまわりついたりする様子は、どこにでもいる子供たちと変わりません。

みんなで歌って体を動かす「音楽タイム」が始まると、子供たちの個性やその日の調子が現れます。ベンチに座って一緒に活動する、教室の隅の方に隠れてしまう、など、さっきまでとは違った行動も。とはいえ、ただ自分勝手に振舞っているわけではなく、周りの様子を窺い

ながら、自分の立ち位置を探っているようです。先生たちも、無理に座らせたりはせず、付かず離れず見守ります。

自閉症の特徴の一つはコミュニケーションが苦手なこと。よく喋っていても独り言のようだったり、言葉が不明瞭なこともありますし、言葉でなく指差しなど、独特な伝え方も見られます。そのことがわかってもらえないと、人と関わりたいという気持ちはあるのに意思疎通がうまくいかず、つまずいてしまうのです。

■経験の共有をきっかけに

そのつまずきを乗り越えるには、人と関わるこ

とが楽しい、という経験をたくさん積み重ねることが一番です。七夕やプールなど、季節の行事も取り入れながら、時には保護者も加わり、先生や友達と一緒に様々な経験をして、楽しい思い出を作っていきます。それを振り返ることが、コミュニケーションのきっかけになります。教室には年間を通じたいろいろな活動の写りが貼ってあり、それを眺めて、その時に自分が感じたことを表現します。共通の思い出だからこそ、先生や友達との会話も弾みます。

この日行われたプール遊びは、子供たちの成長がよくわかる活動の一つです。2年前に、海を見下ろす大きなプールができて、夏の楽しみが増えました。年少クラスの時水が顔にか



副校長(左)と幼稚部主事の加藤敦教諭



躍動 筑波 大生

遊ぶように、稽古を楽しむ

2018年9月に韓国で開催される第17回世界剣道選手権大会に、大学生として唯一、代表メンバーに選出。第64回関東学生剣道選手権大会優勝、第66回全日本学生剣道選手権3位。得意技は小手。目標にしている剣道家は6度の日本一記録を持つ宮崎正裕教士8段。その記録をいつか塗り替えることが夢。自称人見知り。好きな授業は「哲学通論」。

KEITA HOSHIKO

体育専門学群2年 星子啓太さん 剣道部

9月開催の世界剣道選手権大会の日本代表に、星子啓太さんは学生で唯一、選抜された。この大会は3年に一度、アジア、アメリカ、ヨーロッパの持ち回りで開かれ、国別団体戦と個人戦で順位を競う。今回の開催国の韓国は、全戦勝利で完全優勝を目指す日本にとって最大のライバル。これまで日本は2006年に、団体戦で破れており、どちらにとっても負けられない戦いだ。小学校1年のとき、姉の「ついで」に剣道

を始めてから、6年で全国大会で準優勝するほど腕をあげた。「ただ勝つのが楽しかった」という少年時代、中学では伸び悩んだものの、強豪校九州学院高校からの誘いをうけて進学。食事や生活スタイルを見直して、高校では一層、稽古に励み、インターハイで団体・個人ともに優勝を果たした。身長、スピード、パワーのどれも飛び抜けた強みはないが、それらのバランスと安定感が自分の武器だと、星子さんは分析する。「こう打ちたいというイメージを持って練習して、その通りに実践できた時は嬉しいし、自分が打たれて先輩からアドバイスをもらうことも、目標ができたと思えて嬉しい。練習は遊びの延長というか、剣道をするのが純粋に面白い」と話す。

そうは言ってもプレッシャーを感じることもある。代表に選出された以上、学生の大会では負けたくない。不安と焦りから集中できず、全

日本学生選手権大会、全日本選手権予選大会のどちらも満足いく結果が出なかった。その後の代表合宿で、悩む姿を見かねた先輩に「楽しめ」と励まされた。まわりはみんな格上の選手。気負わず狙い、恐れず思いきって打ち込んでいくうちに、剣道のスタイルを取り戻した。稽古を楽しみ、稽古に救われた。

星子さんは、剣道部夏合宿の合間、学内の剣道場で世界大会に向けて抱負を語った。「準備はしました。もう不安はありません。気負って負けるよりは、やってきたことをすべて出して、あとは先輩たちに託す気持ちで臨みたい」。道場に、夏の終わりの風が吹く。



後輩にひびく
高校まで剣道ばかりに時間を費やしてきたので、大学の授業についていけないのか不安もありました。でも部活は練習の質を重視していて、勉強時間も確保できます。筑波大なら、仲間と切磋琢磨して、正真正銘の文武両道が目指せます。



道場の窓際には優勝杯が並び



発展の途上

途上国への住宅支援を行う国際NGO団体「Habitat for Humanity」の「健全な生活を営む生活基盤となる“住まい”を支援する」という理念に共感して、学内で海外建築ボランティアサークルLUZを立ち上げた。これまでカンボジア、ミャンマーで貧困地域の住宅施工ボランティアに参加。好きな授業は「都市計画実習」、少人数でのディスカッションやフィールドワークが刺激的だから。

LUZ

理工学群社会学類3年 宮澤菜々子さん 海外建築ボランティアサークルLUZ代表

子どもの頃からものづくりに関わる仕事がしたいと思っていた宮澤菜々子さんは、社会学類に入学後、都市計画専攻に建築士受験資格が取得できるカリキュラムがあることを知った。建築士を志すなら、まずは実際に家づくりに関わってみたい。調べてみると、国際NGO団体「Habitat for Humanity」が、貧困地区の住居建築に参加するボランティアチームを募集している。このプロジェクトでは、支援対象の地域で、NGOが事前に調達した材料や準備した工程に従って、世界中から集まった若者が、現地の大工や大学生と共に、ブロックを積み、竹を編むといった作業を行い、簡素な家を建てる。宮澤さんは持ち前の行動力を発揮し、「海外建築ボランティアサークル

後輩にひびく
大学生になって、自由な時間の使い方に悩む人も多いはず。私もそうでしたが、興味があることに勇気を出して踏み込んでみてください。失敗を含めて、すべてが自分の未来につながると、身を持って感じています。



LUZ」を学内に立ち上げた。そして仲間とチームを組むと、2年生の夏休みにカンボジア、翌年にはミャンマーで、約2週間ずつ活動に参加した。経済成長の著しいミャンマーでは、一緒に活動した現地の学生たちが「国の発展を担うために、もっと学びたい」と強く語っていた。宮澤さんは、自分も含め日本人の友人から「国のために」といった言葉は聞いたことがない。驚きと同時に不公平感を憶えた。どんなに向学心が強くてもインフラが整っておらず生活基盤が不十分なために、留学や進学のチャンスに恵まれない学生も多い。現場に立ち、体を動かし、国際開発に携わる人々に会おううちに、どんどん自分の関心が広がっていった。「途上国の発展につながるような、インフラ整備を含むまちづくりに携わりたいと思うようになりました」。

3年生になった現在、宮澤さんは都市計画を中心に学んでいる。「将

来の職業を思い描いて大学に入学する人もいるかもしれませんが、私はそうではありませんでした。でも目標ができ、研究室で先生や大学院生の話を聞く機会が増えて、大学で学ぶ面白さを実感しています」と話す。この夏は、TOD（公共交通指向型開発）の分野で現地調査を行う企業のインターンとして、再びミャンマーを訪れる。途上国は、まだ何者でもない自分に針路を示してくれた。熱気あふれる、国際開発の真ん中へ。



ミャンマーでの活動



Homeland

筑波大学には、100を超える国から、約3千人の留学生が訪れています。このコーナーでは、本学の留学生から、出身国の自慢の場所や風景、食べ物など、多岐にわたって紹介していただきます。

ハランベ、力をあわせてケニアのために

●日本の技術力に憧れて

首都ナイロビからバスで7時間ほど、ケニアで5番目の都市、エルドレット近郊の小さな村が私の故郷です。子供のころから車や家電など日本の製品が身近にあったので、エンジニアになって日本でさらに勉強するのが私の夢でした。

モイ大学を卒業してから、アフリカの若者のための産業人材育成イニシアティブ（ABEイニシアティブ）というJICA（国際協力機構）の奨学金を得て、栃木県の足利工業大学の修士課程に入学しました。ケニアは資源に乏しく、国の発展には日本と同じく人的資源を活用することが欠かせません。ABEイニシアティブは、日本の大学院で学んだ後に日本企業でインターンシップを行います。将来的には、このプログラムで支援を受けた学生が母国の産業発展に寄与し、日本とアフリカの橋渡し人材になることが期待されています。

日本については「高い技術力をもつ先進

国」というイメージはありましたが、ほとんど何も知らないまま渡航しました。そこで驚いたのは、英語が通じないことでした。ケニアの公用語はスワヒリ語ですが、都市部や大学では英語でコミュニケーションをとるのは当たり前でした。

ところが日本では普通の生活はもちろん、学校でも日本語ばかり。初めはとても戸惑いましたが、大学のサポートや日本語学習のおかげで、次第に生活に困ることはなくなっていました。日常生活での高いレベルの顧客サービスや公共マナーの良さ、また、昔ながらの文化を大切にしながらも、経済や技術発展していることに感動しました。

博士課程で筑波大学を選んだのは、日本のトップクラスの大学だからです。ケニアの発展に寄与するためには、技術者・科学者として確かな知識と手法を身につけることが大切です。また、英語で学べるプログラムは留学生にとっては大変ありがたいです。つくば市の環境も、自然に溢れていてとても住みやすいと感じています。

●ケニアを知ってほしい

実家が代々農業を営んでいるため、私にとってつくばの畑や田んぼの風景はとても親しみを感じます。ケニアも平和で美しい国だということを知ってほしいと思います。

ナイロビ国立公園は、首都にある自然動物保護区です。高層ビルの立ち並ぶオフィス街から歩いて行ける場所で、野生のライオンやゾウに出合えるのは世界でも類を見ません。また、ケニアとタンザニアの国境沿いにあるマサイマラ国立保護区では、毎年10月から11月にかけて200万頭ものヌーの大群がケニアから川を渡り、餌を求めてタンザニアに移動します。他にも、たくさんの自然公園があります。

マサイ族など42の部族が暮らすケニアでは、部族によって言葉も文化も全く違いますが、「ハランベ」の精神が根付いています。日本語に訳すと、「力を合わせてがんばろう」という意味のスワヒリ語です。同じ場所にいる者なら、違いを越えて交流することができる



Eliud Kiprop

エリウド・キプロブさん

所属 | 生命環境科学研究科(博士後期課程)
持続環境学専攻1年



のがケニア人。それを象徴するのが、ヤギなどの肉を炭火で焼いて食べる「ニヤマチョマ」という料理です。大統領も村の子供も、その場にいる人同士、一緒に食べます。ケニアでは5分も一緒にいれば、お互いに話しかけて、すぐに親しくなれます。日本人の旅行者が、ケニアで友人を作ることは意外に簡単です。

ケニアの観光は、農業、製造業に次ぐ第3の産業です。ケニアでは2017年に新しいタイプの鉄道が運行し始めたばかりで、まだ一部の地域にしかありません。一般的には鉄道の代わりに、「マタトゥ」と呼ばれる乗り合いバスを使います。14人乗りの小さなものから、長距離移動用の大型バスまで、サイズもデコレーションも様々。都市を走るマタトゥは電飾で彩られ、車内では専用のディスプレイで音楽やテレビを楽しむこともできます。

ハイテクな一面もあります。M-PESA(エムペサ)という、携帯電話から送金できる電子マネーシステムです。このサービスは、銀行口座を持っていない人でも、買い物や食事のときに

現金なしで決済でき、知人や家族に送金することもできます。もちろん観光客も利用できます。インターネットの普及はまだ十分ではありませんが、携帯電話回線は国内のほぼ全域に網羅されていますので、どこでも使えて、ケニアのGDPの半分以上のお金が、このM-PESAで動いていると言われています。

●日本とケニアをつなぐ

私は日本とケニア両国の役に立ちたいと思っています。インターンシップで就業体験をした日本企業から、ケニアに関する情報提供を求められることが増えてきました。そこで私は、友人と「HIGASHI Africa Investment Co. Ltd」という会社を立ち上げました。アフリカでのビジネスチャンスを探している日本企業に対して、ケニアのロジスティクスや、人脈、文化など現地情報の提供を行います。ABEイニシアティブの奨学生としても、アフリカにおける日本企業の経済活動を支援することは目的の一つですので、この仕事を軌道に乗せ

たいと思っています。

もちろん、まずは博士課程を修了することが一番の目標です。環境やエネルギーについて学ぶとともに、福島県の風力発電施設や広島県の原爆資料館を訪れたり、熊本県で水俣病の元患者に話を聞いたり、環境開発について考える機会を得てきました。これらの経験も含めて、修士課程までのエネルギーに関するエンジニアリングの知識を活かし、博士課程では、ケニアの持続可能な開発を支えるエネルギー政策について研究をしています。

ケニアの発展にはエネルギー開発は必須です。今は原子力発電や火力発電の導入も検討されています。しかし、私は地球全体の環境問題やケニアでの環境保全を考えると、100%自然エネルギーで賄うべきだと考えています。将来はケニアで大学の教員になりたいと思っています。学んだことを次の世代に伝え、ケニアの発展に貢献していきたい。そのためにも、日本でもっと多くのことを学びたいと思っています。



広島市の平和公園で。日本に来る前から、必ず訪れようと思っていた



マサイ族のダンスジャンプ



ナイロビ国立公園 写真提供:久野真一/JICA



ニヤマチョマパーティーの様子。これは友達と



国内移動の主役「マタトゥ」 写真提供:佐藤浩治/JICA

イベント

Tsukuba Global Science Week (TGSW) 2018

9月20日～22日、つくば国際会議場において、TGSW2018が開催されました。TGSWは、国境や研究分野を超えた連携ネットワークを構築し、地球規模課題に対する解決策を世界に向けて発信することを目的に、本学が2010年から企画・主催しているものです。今回は、国際的な取り組みが進みつつある「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals, SDGs)」に着目し、

「Driving Sustainable Development」をメインテーマとしました。

米国メリーランド大学のベン・シュナイダーマン教授と、国際連合食糧農業機関事務局長補兼アジア・太平洋地域事務所代表のクンダビ・カディレサン氏による基調講演を皮切りに、3日間で43のセッションが行われ、全体で世界162機関、1600人以上が参加し、生命科学や情報工学からスポーツ、芸術、文化ま

で、幅広い視点から議論と交流が図られました。これらを総括し、最終日には、研究開発や教育に携わる者として共に持続可能な発展を推進し、社会に変革をもたらしていくことを確認した「つくば宣言」が採択されました。

TGSWは次回より、学術だけでなく産業界なども含めた、より発展的な議論の場「Tsukuba Conference(筑波会議)」へと進化します。



ベン・シュナイダーマン教授



クンダビ・カディレサン氏

イベント

生存ダイナミクス研究(TARA)センター キックオフシンポジウム



左:大隅良典先生、右:花岡文雄センター長(TARAセンター提供)

1994年5月、当時の江崎玲於奈学長の発案により、学際領域の研究を先導する先端学際領域研究(TARA)センターが設置されました。同センターは、2010年10月に生命領域学際研究センターへの改組を経て、2018年4月、その役割をより先鋭化するために、生存ダイナミクス研究(TARA)センターへと生まれ変わりました。

TARAセンターは当初、時空間生命制御、生命情報機能、総合人間科学、新物質創製、マルチメディア情報等の研究領域を掲げてスタートしましたが、今回の改組にあたっては、「代謝」「免疫」「循環」「生殖」という本学が強みを持つ研究テーマを前面に掲げ、さらなる分野横断的研究に邁進することになりました。

これを記念して、7月2日、大学会館特別会議室にてキックオフシンポジウムが開かれ、会

場はおよそ300人の参加者で埋まりました。

シンポジウムでは、花岡文雄センター長、永田恭介学長、文部科学省研究振興局西井知紀学術機関課長の挨拶に続き、TARAを構成する4つのプロジェクトから各リーダー、深水昭吉教授、渋谷彰教授、柳沢裕美教授、小林悟教授の学術講演があり、密度の濃い議論が交わされました。

締めくくりには、2016年度ノーベル生理学・医学賞受賞者、大隅良典先生による特別講演「40年の酵母液胞研究から見えてきた世界」が行われました。大隅先生は、人がやらない研究を目指して、新たな研究領域を切り開いた自らの研究生生活を振り返ると同時に、基礎研究の重要性を強調されました。まさに新生TARAの門出にふさわしい内容でした。

教育

体育教育を通じた国際交流 Tsukuba Summer Institute 2018を開催

7月11日から7月17日にわたり、Tsukuba Summer Institute (TSI) が、本学体育エリアで開催され、11か国19大学(海外から106名、本学学生を含む日本人28名)が参加しました。TSIは、海外の学生と日本の学生がスポーツ・体育の実践や、それにかかわる講義・演習を通して交流するプログラムで、大学生及び大学院生を対象に、2010年から行われています。

このプログラムでは4つのコース、①体育・スポーツにかかわる研究の進め方、②日本の伝統的な武道(柔道、剣道、弓道、合気道等)を中心とした、日本の体育、スポーツ、身体文化、③運動生理学やスポーツ医学、④スポーツを通じた国際開発、の中から参加者は1つを選択し、プログラム終了時には1単位を取得することができます。いずれも海外から招いた著名な研究者や本学の教員らによる講義、実技、演習などを含みます。昨年からは、JICAの体育教育プログラムも合わせて開催



されています。

学生たちはそれぞれ希望したコースで学びながら、英語を主な共通語にコミュニケーションを図り、交流を深めました。参加者からは、「TSIで学修した体育の指導法を自分のティーチングスキルとして活かしたい」などの感想があり、実践的なプログラムが好評でした。

来年は10周年を迎え、これまでの受講生が集まる同窓会も企画されています。



武道体験(剣道)の参加者

小・中学生向け学習イベント「ちょこっと探究クラブ」

8月27日、東京キャンパス文京校舎において、小学校高学年～中学生を対象とした学習イベント「ちょこっと探究クラブ」を開催しました。およそ250人が訪れ、校舎1階のラウンジと6つの教室に設けられた10コーナーを巡りながら、工作や観察、ワークショップなどに参加し、夏休み終盤の1日を楽しみました。

各コーナーでは、哲学や高齢者体験、マインドフルネスといった、普段の学校では扱われることのないテーマから、数学パズルや立体折り紙、国語辞書クイズ、花の構造観察、栄養学教室、スポーツ用具の進化、構造物の強度など、小中学校での勉強や日常生活との関連性が意識できるものまで、幅広い分野の

活動が行われました。それぞれ、本学の教員が自身の専門分野を生かした内容や教材を企画・準備し、学生の協力も得て、子供たちの指導にあたりました。どのコーナーでも、遊びの要素もありながら、じっくり考えなければクリアできないような課題が与えられ、参加した子供たちはみんな、真剣な表情で取り組んでいました。

また、各コーナーを巡るスタンプラリーも行われ、スタンプを集めた子供たちは、ガチャマシンを回して、本学のスペシャルグッズを手に入れました。ガチャマシンもスペシャルグッズも、本イベントだけのお楽しみです。なかなか足を踏み入れることのない大学という場所で、ちょっと難し

い課題にチャレンジした達成感とともに、小さな満足感も得て、校舎を後にしました。

この「ちょこっと」シリーズは、毎年4月の科学技術週間に筑波キャンパスで開催される「キッズ・ユニバーシティ」の姉妹版として企画されているもので、少しずつ工夫を加えながら、今回で3回目を迎えました。文系・理系を問わず、本学のユニークな研究活動を紹介し、その一端を実際に体験してもらうことで、子供たちが、現在の学校での学びと大学での研究との関連を発見したり、将来の進路選択のきっかけを得られるような機会を提供することを目的としています。



軽くて強い橋コンテスト



高齢者を体験する



花の美しさのヒミツを探る



国語辞書で遊ぼう



球体折り紙に挑戦!



数学パズルランド探検隊



目に見えない哲学を、見て触って考えよう!



スポーツ用具の進化を体験しよう



「からだ」で「こころ」を調える:マインドフルネス入門



自分の内側をはかる。そして知る。

「筑波大学コトノハチーム」が、復興大臣より感謝状を受贈



コトノハチーム。吉野准教授(後列中央)、馬籠清子准教授(前列右)

7月5日、「筑波大学コトノハチーム」(代表:人文社会系吉野准教授、馬籠清子准教授)に、復興大臣から感謝状が贈呈されました。東日本大震災で被災した福島県南相馬市小高地区の方々との交流を、平成26年から続けてきた活動が評価されたものです。

コトノハチームは、被災者にどのような支援ができるのか、まずは仮設住宅で当事者の話に耳を傾けることから始めました。度々訪れて対話を重ねるうちに、震災の辛い出来事や不安を口にしていたお年寄りからも、次第に家族の思い出や、地元小高地区の昔話などの楽しい話が聞かれるようになったといいます。そこで、被災者から小高に伝わる昔話

や風習を聞き取り、絵本や紙芝居を作ることになりました。若い世代と故郷の思い出を共有することで、地域の生活の記憶を取り戻し、心の復興につながると考えたからです。

これまでに、13の絵本や紙芝居を制作し、仮設住宅の集会所などでの朗読会や上演会を通じて、世代を超えた交流の場を設けてきました。

2016年に小高区の避難指示が解除となり、現在は、帰還した住民と、小高の生活文化の良さを再確認する活動を行っています。ここで選んだのが食文化を伝える試みです。小高の郷土料理を地元の子供たちや、他県の人々にも知ってもらうために、レシピ作りや試食会などを企画しています。



集会場での交流会。故郷の昔話に笑みがこぼれる

コトノハチームのメンバーで比較文化学類2年の高橋奈央さんは、「震災の影響で農作物が育てられなくなったり、子供たちが郷土料理を知らなかったり、この土地らしい食の文化が断たれてしまうのではないかと不安をみなさんが口にしていました。私はそれをつなぐ手伝いをしたいです」と、今後の活動に意欲を示しました。

生涯現役社会を考えるコミュニティカフェを開催

8月24日、本学サテライトオフィスで、医学医療系の「医療と介護と福祉をつなぐ会」によるイベント「医療と介護と福祉をつなげるコミュニティカフェ～もやもやをかたちに～」が開催され、この分野に携わる幅広い年代の人たち、およそ30人が参加しました。

はじめに、一人ひとりで「自分は何歳まで生きたいのか、父・母・子に何歳まで生きて欲しいのか」を考えました。そして、人気アニメに登場する

家族の年齢設定をもとに、具体的な老後のイメージを膨らませます。次に、医学医療系の上野友之講師が、スライドや映像を使いながら、健康寿命や過去と現在の寿命の変化について解説し、それをふまえて、生涯現役社会をテーマにグループ内で意見を交わしました。

参加者は、それぞれの立場から見える考えや悩みについて盛んに話し合い、職種を越えた交流も生まれる機会となりました。



活発に議論する参加者

2018 ISS Award for Compelling Results : 「きぼう」での研究成果

医学医療系の高橋智教授とJAXA(宇宙航空研究開発機構)との共同研究チームが、国際宇宙ステーション(ISS)を活用した顕著な研究成果に対して与えられる「ISS Award for Compelling Results」を受賞しました。これは、NASAなど宇宙開発研究を推進する機関が主催し、米国で毎年開催されるイベント「ISS R&D Conference」において選出される賞です。

今回、高橋教授らが受賞した研究成果は、

「マウスの筋肉への重力影響に関するトランスクリプトーム分析」です。日本実験棟「きぼう」において、微小重力および人工重力(1G)環境下でのマウスの長期飼育に世界で初めて成功し、重力が動物の骨や筋肉の量に与える影響を、遺伝子レベルで明らかにしたことが評価されました。これらのデータは、動物の身体形を決める重要な要素となるものと考えられ、生物学・生理学の発展にも貢献することが期待されます。



高橋智教授(右から2番目)

科学技術振興機構理事長賞：大学発ベンチャー表彰2018



山際伸一准教授(中央)

システム情報系の山際伸一准教授が代表を務める大学発ベンチャー、ストリームテクノロジー株式会社と九州工業大学は、「大学発ベンチャー表彰2018」(科学技術振興機構、新エネルギー・産業技術総合開発機構主催)において、「科学技術振興機構理事長賞」を受賞しました。

この賞は、大学等における研究開発成果を用いた起業および起業後の挑戦的な取り組みや、今後の活躍が期待される優れた大学発ベンチャーとともに、特にその成長に寄与した大学

や企業などに与えられます。

山際准教授は九州工業大学との共同研究を通じて超高速データ圧縮という技術を開発し、市場に展開しています。この独自技術が高く評価され、今回の受賞となりました。この技術は、大規模なデータを扱うMRIやCTなどの医療画像診断機器から身近なパソコンやスマートフォンまで、あらゆる電子機器に搭載し、システムのコンパクト化、高速化、低電力化に加え、災害対策や新しいエンターテインメント機器の開発など、多岐に渡る分野での貢献が期待されています。

「筑波大学ショッピングプラザ」オープン

10月1日、天久保池南側の本学敷地内に、「筑波大学ショッピングプラザ」がオープンしました。ここでは、茨城県を中心に関東圏で展開するスーパーマーケット「カスミ」と、本学が協定を結んでいる、ブラジル連邦共和国のサンタ・クルス病院の理事長が所有する農園で収穫したコーヒーを販売している「サザコーヒー」が出店します。

このショッピングプラザにより、学生や教職員の福利厚生、利便性の向上が図られます。もちろんどなたでも利用できます。



ミステリアスな化石は二度眠る——収蔵庫で見つかった幸運な「古い謎」



パレオパラドクシアの復元図(足寄動物化石博物館の新村龍也さん作画)

太古の地球に生息していた動物の遺体が化石標本として保存されるには、多数の幸運が重ならなくてはなりません。その化石が発見され、研究者の目に留まり、正体が判明するまでには、ながい道のりが存在します。

きっかけは、2017年6月、国立科学博物館地学研究部の木村由莉研究員が、化石の保管状況を見るために本学を訪れたことでした。案内をした生命環境系の上松佐知子准教授は、標本台帳に記載されていない正体不明の大きな

化石あったことを思い出し、見てもらうことにしました。その化石を一目見た木村さんは、東柱類と呼ばれる大型哺乳類の右大腿骨だと判定しました。これは1000万～3000万年前に北太平洋沿岸に生息していた半水生の絶滅哺乳類です。

研究チームを結成し、さらに調査を進めたところ、化石の正体については、本学の卒業生で東柱類の専門家である松井久美子さん(現在は九州大学博物館研究員)が、パレオパラドクシア属(学名は「古い謎」という意味)の右大腿

骨であると同定しました。化学分析の結果、1000～1600万年前のものと判明しました。

一方、この化石は、60年以上前に東京教育大学に委託され、東柱類のデスマスチルス類だろうと見なされたまま忘れられていたものでした。追跡調査をしてみると、福島県土湯温泉の砂防ダム工事現場から約65年前に見つかり、現地では「恐竜の骨」として知られていた化石であることがわかりました。

パレオパラドクシアは、現生する動物との系統関係が不明なグループで、その詳しい生態も謎に包まれています。見つかった化石は、表面の保存状態が良いことから、筋肉の付き方などの研究が進み、生態解明に弾みがつくと期待されます。

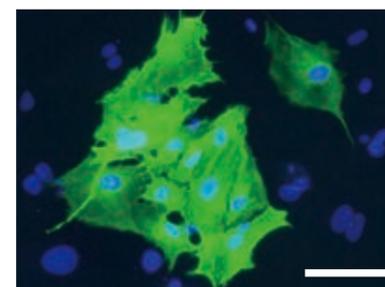


木箱に入った状態で見つかった化石

心臓再生治療に朗報——新たな心筋作製技術を可能とする遺伝子の発見

心不全は、癌に次いで多い日本人の死亡要因です。心筋細胞は再生できないため、心疾患により機能が低下すると心不全となり、それが悪化すると死に至ります。心臓移植に代わる新規治療法の開発が望まれています。

医学医療系(循環器内科学)の家田真樹



ネズミのしっぽの線維芽細胞からTbx6遺伝子によって誘導された心臓中胚葉細胞。(スケールバーは100μm)

教授は、マウスを使った研究で、筋肉を構成する線維芽細胞に3つの遺伝子を導入すると心筋細胞になることを発見していました。つまり、線維芽細胞の遺伝的な設計図を書き換える(リプログラミングする)ことで、心筋を蘇らせることができるのです。しかしこの方法では、1個の線維芽細胞から1個の心筋しか作れません。

それに代わる方法として有効なのが、心筋細胞だけでなく、血管平滑筋細胞や血管内皮細胞など、すべての心臓細胞の元となる心臓中胚葉細胞を作り、そこから各種の心臓細胞を作るというやり方です。心臓中胚葉細胞は増殖能があるため、たとえば心筋細胞を増やすこともできます。

心筋細胞を作るには、ES細胞やiPS細胞などの、何にでもなれる多能性幹細胞を利用する

方法もあります。しかしこれには、複数の高価な液性因子(薬剤)が必要な上に、その工程が不安定で煩雑であることが課題となっていました。

今回、家田教授の研究グループは、心筋細胞で働いている58個の遺伝子を試したところ(スクリーニング)、ある1個の遺伝子が心臓中胚葉細胞への誘導を起こすことを発見しました。そして、その遺伝子(Tbx6)を線維芽細胞に導入し、心臓中胚葉を作製することに成功しました。このTbx6遺伝子は、これまで、体節(骨格筋、脊椎、骨)を形成する上で重要な遺伝子として知られていたものです。

今後、心筋梗塞や拡張型心筋症をはじめとする、様々な心臓疾患に対する再生医療への応用などが期待される研究成果です。

第18回アジア競技大会(2018ジャカルタ・パレンバン)で 在学生・卒業生が活躍

8月10日から9月2日にジャカルタのパレンバンで開催された、第18回アジア競技大会において、本学在学生および卒業生22人が15の競技に出場し、体育専門学群3年の梶原悠未さんの自転車競技トラック 女子オムニアム、卒業生の小林悠輔さんの柔道競技男女混合団体90kg級での金メダルなど、合わせて計15個(金2個、銀5個、銅8個)のメダルを獲得しました。



自転車女子オムニアムで優勝した梶原悠未さん(写真中央)

本学関連の入賞者

競技	選手名(所属)	種目/ポジション	結果
柔道(男子)	佐々木健志(体育4)	男子81kg級	5位
	小林 悠輔(H28卒/旭化成)	男女混合団体90kg級	金
陸上競技(男子)	山下 潤(体育3)	男女混合4×400メートルリレー	5位
	戸邊 直人(人間総合D3/つくばインビークス)	走高跳	銅
	衛藤 昂(H27修了/味の素AGF)	走高跳	6位
	山下 航平(H30卒/全日本航空)	三段跳	4位
陸上競技(女子)	世古 和(H26卒/乗馬クラブクレイン)	4×100メートルリレー	5位
	勝山 眸美(H29卒/オリエンタコーポレーション)	ハンマー投	銅
サッカー(男子)	三笥 薫(体育3)	ミッドフィールダー	銀
バレーボール(男子)	小澤 宙輝(体育3)	ウイングスパイカー	5位
	出来田 敬(H26卒/プレーザーズスポーツクラブ)	オポジット	
自転車(女子)	梶原 悠未(体育3)	トラック オムニアム	金
		トラック チームパシュート	銅
		トラック マディソン	4位
自転車(女子)	與那嶺恵理(H27卒/Wiggle High 5 Pro Cycling)	ロード 個人タイムトライアル	銀
		ロード 女子	銅
レスリング(男子)	高橋 侑希(人間総合M2/総合警備保障)	57kg級 男子フリースタイル	銅
競泳(男子)	金子 雅紀(H26修了/イトマン東進)	男子100m背泳ぎ	4位
		4×100メドレーリレー	銀
水球(男子)	棚村 克行(H25卒/ブルボン)	ゴールキーパー	銀
ハンドボール(男子)	坂井 幹(H30卒/豊田合成)	ゴールキーパー	4位
ハンドボール(女子)	石立真悠子(H21卒/福井県スポーツ協会)	センター	銅
ラグビー(男子)	本村 直樹(H28卒/本田技研工業)	バックス	銀
カヌー(女子)	小野 祐佳(H25卒/秋田県体育協会)	カヌースプリント 女子カヤック シングル 200m	銅
		カヌースプリント 女子カヤック ペア 500m	銅

世界のトビラ

筑波大学は、海外の教育研究機関と連携し、学生・教職員の受け入れや派遣、交流イベントの開催など、国際的にも「開かれた大学」を目指して、さまざまな活動を展開しています。

留学先での生活をバックアップ

筑波大学の海外13拠点のオフィスでは、本学から留学している学生向けに、様々な申請手続きや、新生活を整えるためのサポート、生活や学習の相談などにも応じています。またOB・OGによる現地同窓会の存在も、心強い味方になっています。

人間総合科学研究科1年の水野真実子さんが所属する「国際連携食料健康科学専攻」は、学期毎に日本、台湾、フランスの3カ国の提携校を移動しながら、食と健康について学ぶ、共同学位プログラムです。この春学期を過ごした国立台湾大学の公衆衛生学院は、公衆衛生に関する基本から派生する様々な問題まで、幅広く学ぶことのできる世界有数の大学です。

学期が変わる度に、全く違う国、違う環境で学ぶことに対して、不安もあったという水野さんですが、「到着日に、すぐ台湾オフィスのスタッフの方が入寮手続きや日用品の購入のサポートをしてくれて、スムーズに新生活に入っていくことができました。台湾で他の大学に留学している筑波大生と交流の機会もあって、現地での生活に役立つアドバイスを頂きました」と、滞在中の様子を語りました。国立台湾大学では、「小学生の肥満問題」というテーマに取り組みました。



台湾滞在中の同じ専攻の仲間と(後列、左から3番目が水野さん)

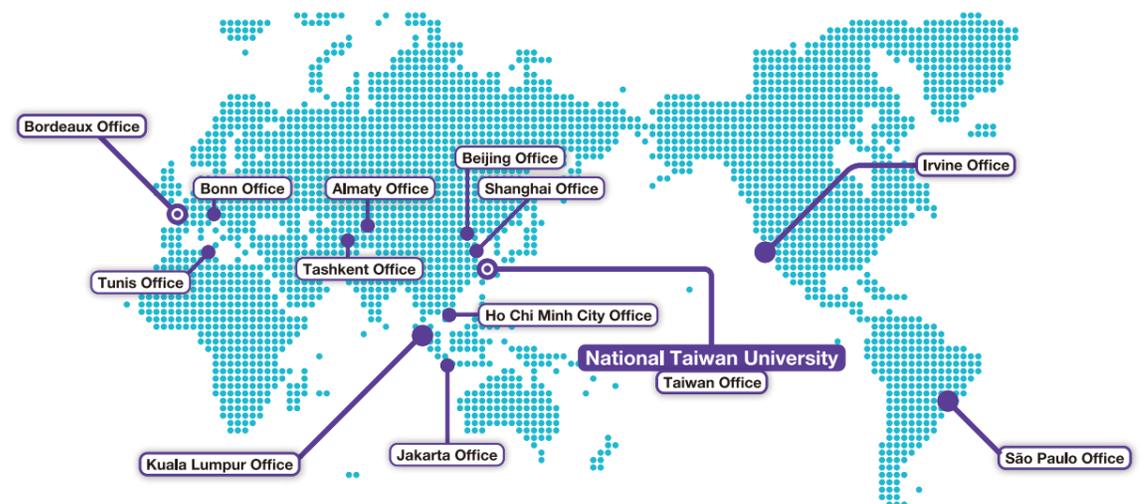


台湾オフィス前で、サマープログラムに参加した学生と(左が大庭准教授)

台湾オフィスから

2015年4月より2名のスタッフ(本学教員と現地スタッフ)が常駐しています。入寮手続きや布団貸出といったスタートアップの手伝い、パスポート紛失や病院の紹介など生活サポートから、キャリア相談まで様々なことに対応します。また、日本からの留学前相談や、台湾での企業インターンシップに関する問い合わせには、Skypeを活用して情報提供を行っています。

(台湾オフィス運営管理者 医学医療系 大庭良介准教授)



ツクバで ツナガる リレー メッセージ

5000人を超す教職員がいる本学。

それぞれが切り取るツクバの「今」を、8本のバトンでつなげていきます。

中国の高校生に筑波大の魅力を!!



生命環境エリア支援室
高谷 創 さん

BATON
01

筆者右端

私が所属する生命環境エリア支援室では、中国連携事業の支援のため、「中国連携サポートチーム」を結成しています。私はこの取り組みの一環で、昨年、中国の高校生へ筑波大学の魅力を紹介するため、先生方・学生さんと一緒に上海と蘇州へ行きました。実のところ、私は入職以来、財務畑のため教育に関わる仕事にほとんど縁がなく、数字ばかり相手にしていました。けれども、このようなサポートチームの活動に関わることができ、筑波大学は世界と繋がっていて、本学が担っている役割、期待されている役割は大きいなあと肌で感じています!

NEXT
今回は、病院総務部品質・安全管理課の塚原宏隆さんです。「同期入職のうちの1人です。パーティ大好き、グルメで面白い人です」

私は、日本・中国・香港で教育を受ける中で、様々な異文化を経験し、その楽しさや驚き、時には怒りや悲しみを感じてきました。文化で生じるコンフリクトを避けるには、懸け橋となれる人材が必要だと思います。個性豊かな筑波大学生に共通する素質として、「寛容力」と「柔軟性」があると思います。それは、文化の懸け橋となる必要な素質ではないでしょうか。筑波大学には、数多くの留学生もいることから、異文化を体験できる絶好の環境があります。皆さんも、筑波大学で異文化を体験し、文化の懸け橋になりませんか。



ビジネスサイエンス系
朱 藝 さん

BATON
02

文化の懸け橋に

NEXT
今回は、芸術系の黒田乃生さんです。「[文化的景観の保全]の専門家であり、現地にも積極的に足を運ぶ精力的な活動家の先生です!」



歌で盛り上げたい

BATON
05

第二エリア受付
堂嶋ゆうか さん

約5年前より、第二エリアで、受け付け業務に従事しております。このエリアで様々な国籍の方々との交流があり、異文化交流の大切さを学ばせて頂いています。その傍ら、オフの時にはシンガーソングライターとして活動しております。私が作詞作曲する曲のテーマは主に、「生きる」事。そして歌を通して、一人一人の心に寄り添い、「決して一人ではない」という居場所を作りたいと言う想いで歌っています。いつか、つくば市や大学関係等でライブを通して、盛り上げて行く事の出来る存在になりたいと願っています。

NEXT
今回は、人間エリア支援室の小林とよみさんです。「いつも笑顔でまわりの方々に元気を与えていてとても素晴らしい方です」

CONNECTING PEOPLE THROUGH BODY AND MIND

YOGA is for ALL those people caught up in whirlwind of a fast-paced stressful 'modern' life having difficulties to cope leading to inaction. Colleague & yoga master Genboku Takahashi: "yoga is one of the particularly outstanding forms of wisdom human beings have ever engendered, to overcome suffering." Shall we yoga? It begins with an acceptance of ourselves as we are. Neither can this process be taught to others, nor learned from others, but each has to explore one's own way to encounter "who I am". Yoga practice requires effort and patience; it is like research. In Nara period (710 - 794 AD), Yuga (Yoga) practice (瑜伽) was imported into Japan as one of spiritual practices (Gyoho) of Buddhism. Yoga is being popularly practiced as it is 'fashionable' and for decreasing stress, but more importantly to improve human performance in professional fields, including nursing and sports. University of Tsukuba Graduate General Education Courses (GGEC) program and TAIKU established YOGA COURSE for graduate students (and society) across disciplines training healthy body and mind of youth with a strong spirit that can adapt to stress and global society.

NEXT
今回は、体育系のLYRAS ALEXISさんです。[He is an esteemed colleague who is an expert on the OLYMPISM in ACTION/OLYMPIC EDUCATION, and SPORT for DEVELOPMENT and PEACE disciplines.]

BATON
06

体育系
RAKWAL
RANDEEP さん



自分の興味を突き詰められる研究環境



筆者右端

NEXT
今回は、医学医療系の金丸和正さんです。「学群生では同じ陸上競技部に所属し、日々練習に明け暮れていました。テーマは異なりますが、現在も同じ研究者としての同期の存在はとても刺激になっています」

BATON
07

国際統合睡眠医科学研究機構
征矢 晋吾 さん

体育専門学群を卒業して以来、約6年ぶりにまたつくばの地に戻ってきました。現在は国際統合睡眠医科学研究機構(IIIS)にて睡眠の謎を解明すべく研究を行っています。私自身は覚醒の制御システムを明らかにすることによって「睡眠とは何か」という問いに迫れると考え、櫻井武教授の下で主に覚醒時の様々な行動の神経メカニズムを研究しています。IIISはとてもオープンかつ国際色溢れる雰囲気、立場に関係なく誰でも気軽にディスカッションできる環境が魅力です。睡眠・覚醒の研究に興味がある方は是非一度お越しください。

NEXT
今回は、国際室の二ノ宮崇司さんです。「中央アジアのカザフスタンにある、本学アルマトイオフィスに勤務されています。頼れるカザフ語の達人です!」

附属病院リハビリテーション部
丸山 剛 さん



筆者左端

BATON
03

入職してから先輩の誘いで始めたのがゴルフです。スコアだけでなくクラブなどの道具にこだわったり、ファッションも気にしたり楽しみが尽きません。院内でも始める人が増えており、ゴルフを通じて他病院、学内・学外を問わず色々な方々とも出会いがあり、ゴルフを通じて多くの仲間が増えているのも自分にとって知見が広がり勉強になっています。昔はどこでも素振りをするおじさんを理解できませんでしたが、今では理解することができ同じことをするように注意しています。ゴルフから学ぶ事も多く、なんかハマっちゃってるんです。

NEXT
今回は、体育系の中田由夫さんです。「ゴルフを通じて知り合い、ほぼ同時期に始めたはずなのにスコアでだいぶ差を広げられてしまった研究・練習熱心な尊敬する方です」

BATON
04

人文社会エリア支援室
杉本久美子 さん

私が担当する地域研究イノベーション学位プログラム(ASIP)は、今年で6年目を迎える学士・修士一貫性の教育プログラムです。留学先は新興国、派遣先は世界15カ国、修士課程での交換留学必修、とチャレンジングな教育内容ですが、これまでに総勢50名の学生が参加しています。文化的差異や言語の違いをものともせず、異国に意気揚々と飛び込んでいく勇気あるプログラム生たちを応援していただければ幸いです!(Facebook:@tsukuba.asip.glocal, Twitter:@tsukuba_asip)

異国へ飛び込め!



筆者最後列右端

8/11の山の日に合わせて筑波山で開催された「がまレース2018」に参加してきました。筑波山の鳥居前から筑波山神社にかけて約350mの坂道を、がまマスク(サイズフリー...)を被って走るというレースで、日ごろ運動不足の私でも挑戦できそうな距離に魅力を感じ娘と一緒に走りました。当日は、どこを見渡しても黄緑のがまマスクを被った人ばかり!普段見慣れない光景を楽しみつつも、思った以上に体が堪えたレースでしたが、何とかゴールできました。暑い中でのイベントではありますが、来年以降も継続して開催されることを願っています。



筆者左

BATON
08

総務部人事課
山口智妃露 さん

NEXT
今回は、人間エリア支援室の今泉真智子さんです。「職場の同僚として、またママ友としても昔からずっとお世話になっています」

がまマスクで疾走!

IMAGINE THE FUTURE.

本学のブランディングは、平成21年に筑波大学のアイデンティティ(UI)の確立を目指すための、「筑波ブランド」構築の検討を始めたことに端を発します。“筑波らしさ”＝“筑波ブランド”を包括し、本学が学内外に伝えたいメッセージです。

筑波大学は「新構想大学」と呼ばれ、「開かれた大学」を開学の理念として生まれました。旧来のありかたを反省し、「学際」そして「国際」化への「改革」を掲げた、原点もアイデンティティもここにあります。その後の時代の流れをみれば、この理念の予見したものが、いかに先進的であったかがわかります。学際化、リベラルアーツ教育、産業と学問の連携、国際交流、留学生の受け入れなど、ことごとく時代の求めるところとなってきました。私たちは、この理念の先進性、先見性を誇りに思うべきです。

あえていうならば、私たちは「伝統校」「名門校」の称号よりも、新しい、開かれた「先端校」「先進校」の理念を選んだのです。東京高等師範、東京教育大学という伝統の誇りはいまでも私たちの内にありますが、東京を離れ筑波に地を得たとき、誓ったものは新しい「改革」と「挑戦」の理念でした。

「筑波」とは地名ではなく、その理念の代名詞と思うべきです。改革者は改革をやめず、開拓者は開拓をやめません。つねに、開かれてあること。みずからの改革をつづけ、時代の矢印となること。筑波大学が目指すナンバーワン、オンリーワンとは、最も「未来志向」の大学であること、ではないでしょうか。世界と未来に向けたTSUKUBA CITYの中核として。医学・体育・芸術もあり、肉体生と感性の領域まで含む人間理解と人材育成を目指す、真の意味での総合大学＝UNIVERSITYとして。

筑波大学とは「未来へのフロントランナー」である、と、あらためて確認して、この新しい伝統のバトンを、耐えることなくリレーしていきたいと思えます。



“紀元前470～450年代のギリシア古典期彫刻のブロンズ像は、この像のほかにはデルフォイの御者像(The Charioteer of Polyzeos; Museum, Delphi, Inv.3484-3540)しか現存しないので、その希少性のみではなく、芸術的価値からいってもギリシア彫刻史上はもとより、西洋美術史上の第一級の傑作といっても過言ではない”

「アルテミシオンのポセイドン像レプリカ」
伊藤 鈞(芸術学系教授)
筑波大学芸術年報1982



紀元前5世紀のギリシア彫刻の傑作「アルテミシオンのポセイドン像」のレプリカが、本学に2点あります。ひとつは、アテネ考古学博物館に所蔵されている真作から、ギリシア政府が型を取って製作した石膏像で、大石膏室に置かれています。

もうひとつは、その像を原型として、芸術学系の伊藤鈞教授(当時)が、国内有数の鑄造家らと共同して鑄造したブロンズ像です。1980年12月、大学会館講堂ロビーに展示され、翌1月に除幕式が挙行されました。その

後、総合交流会館の開館や嘉納治五郎像の設置などに伴う移設を経て、現在は6B棟2階入口前で、威厳あるその姿を見ることができます。

ところで、「アルテミシオンのポセイドン像」は本来手にしているべき武器を持っていません。まだ見つかっていないのです。海底で発見され、引き上げられた1926-1928年当初は三叉槍を持つポセイドンだとされていましたが、その後の研究で雷電を放つゼウスである可能性が指摘されています。



Events Calendar

10 October

- 1日(月)・開学記念日
 - ・秋学期授業開始
 - ・「筑波大学ショッピングプラザ」オープン
 - ・第2次選考「AC/国際科学オリンピック/国際バカロレア/海外教育プログラム」(~15日)
- 3日(水)・篤志解剖体慰霊式
- 10日(水)・Diversity Week 2018(~12日)
- 19日(金)・合格発表「AC/国際科学オリンピック/国際バカロレア/海外教育プログラム」
- 28日(日)・第5回国際スポーツボランティア育成プログラム [附属中・高等学校桐蔭会館、11/3:東京キャンパス] 【第6回 12/16:東京キャンパス、12/23:附属中・高等学校桐蔭会館】
- 29日(月)・附属図書館特別展「グローバルに挑む群像—幕末から明治へ—」(~11/30)

11 November

- 2日(金)・学園祭(~4日)
- 3日(土)・第21回(平成30年度)ホームカミングデー
- 9日(金)・2018ヤングアメリカンズ つくばスペシャル[大学会館](~11日)
- 17日(土)・秋季スポーツデー(~18日)
- 29日(木)・入学試験「推薦/帰国生徒(体育・芸術)」(~30日)

12 December

- 9日(日)・共生社会を目指す「スポーツ交流とシンポジウムの集い」 [附属中・高等学校体育館、桐蔭会館]
- 12日(水)・合格発表「推薦/帰国生徒(体育・芸術)」
 - ・平成30年度T-ACT公開シンポジウム[大学会館]
- 15日(土)・SGH全国高校生フォーラム[東京国際フォーラム]
- 17日(月)・秋ABモジュール期末試験(20日~26日)
- 22日(土)・朝永振一郎記念第13回「科学の芽」賞表彰式・発表会[大学会館]
- 27日(木)・冬季休業(1/6)

